私の被爆体験記

小　槙　　尚

昭和二十年八月九日、当日は晴天で空襲警報も発令されておらず、警戒警報中だったと記憶しております。

当時私は軍人として、長崎市土井首小学校に駐屯しておりました。ご承知の通り長崎市は山と海にかこまれたすり鉢の底のような地形で、土井首町は野母半島へ通ずる街道の小高い峠に所在しており爆心地から約八キロ離れておりました。

思い起こせば丁度昼前の休憩時間で、校庭に立っていた時でした。突然上空一杯に閃光（せんこう）が走り、一瞬目が眩んだ直後にドーンと強烈な爆風が襲い吹き倒されました。その瞬間校舎のすべての窓硝子がナイフのような鋭い破片となってくだけ散って校庭に突き刺さったのを思い出します。

要塞司令部からの命令を受けて私の小隊はすぐに爆心地へ向かいましたが街へ近づくにつれて目の前の風景が、昨日までのあの美しい景色、たたずまいが何処へ行ったのか、余りの変貌に息を呑みました。港に面した山腹、向うに見える島々のすべての樹々が燃え上っており、街は瓦礫（がれき）の山と化して目を疑うばかりでした。

茫然としている暇もなく、市中を通り焼けただれた学校、工場、商店街の残骸（ざんがい）の傍を避け乍ら爆心地の浦上地区に入りました。

悲惨などと云う言葉を超えた惨状は目を覆うばかりで地獄のありさまでした。

道路は瓦礫で埋まり、人、牛、馬の死体が累々と目鼻も判らぬ状態であったこと、国鉄浦上駅の横に、十字に積み上げられたレールの中へ吹き飛ばされた人体がいくつかめり込み原形も留めないで肉片がとび散っていた状態や、民家の土台だけが残っていて、その中に猿の黒焼きのように縮んで手首や足先のなくなった遺体が丁度家族のまとまりで重なっていたこと。また頭髪が焼けてなくなり顔もただれた婦人が子どもを抱いたり手を引き乍ら続々避難して行